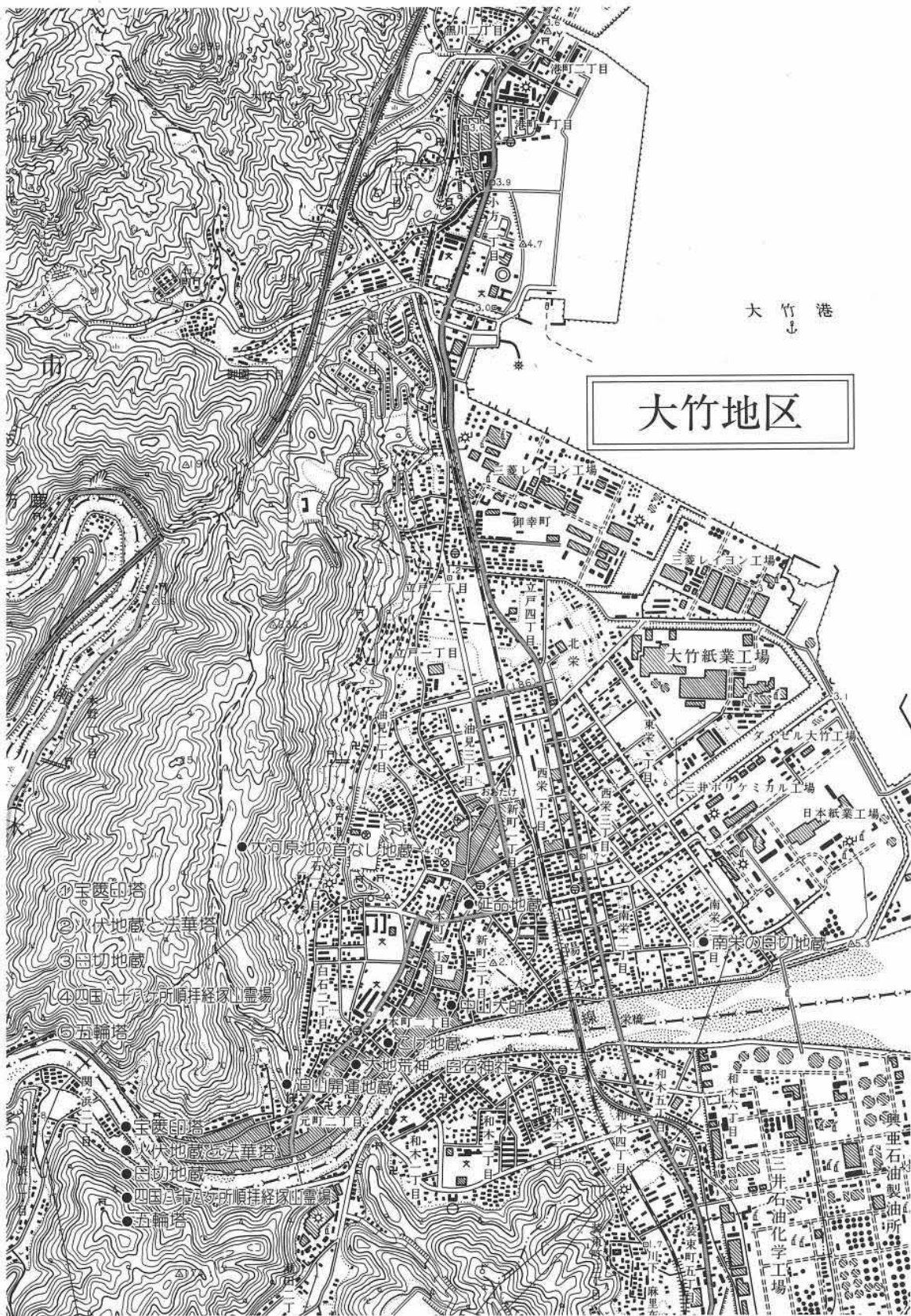




宝篋印塔

所在地 大竹市元町四丁目
塔 高 一m四十cm
石の種類 花崗岩



宝篋印塔

もともと、宝篋印陀羅尼經を納めた供養塔であったが、日本に伝わってからは、經典を奉藏しないで、石造物化し、鎌倉時代より多く造られ、供養塔・墓石として用いられるようになった。

薬師寺境内の本殿に向かって左側にあるこの宝篋印塔は、市域でここだけにあり貴重な文化財の一つである。

江戸中期に入つて、庶民の中に信仰が盛んになるとともに、石造物の建立がきわだち始めた時期である。この塔は、技術的にも大変優れた石造遺物である。塔身上段には、金剛界五仏を梵字（サンスクリット文字）で表している。但し大日如来は宝篋印塔自体であるので梵字は、東西南北の四面である。

東・阿闍如来 ウン	西・阿彌陀如来 キリク	南・宝生如来 ダラーク	北・空成就 アク
--------------	----------------	----------------	-------------

塔身下段には

本願如実法師 奉施入当村 有縁男女
為二世安楽 明和八年卯歳正月吉日
と確かな筆さばきで書かれている。

この年を前後して、天候不順に悩まされた厳しい生活環境の中で、この塔を建立したのは、容易ならざる願いが込められたのであろう。



法華塔

所在地 大竹市元町四丁目

像 高 四十八cm

彫刻の形式 丸彫り坐像

石の種類 花崗岩

薬師寺の山門を入ると左側に、台座に「法華塔」と刻まれた地蔵さんが祀られている。この地蔵さんは、本殿左の「宝篋印塔」をお守りする役割をもつ地蔵さんで、宝篋印塔建立の翌年明和九年（一七七二）に建立されている。

この年明和九年は、全国的に天候不順で、七月上旬九州に暴風雨、八月上旬東海・関東に暴風雨・洪水、そして八月下旬には中国・四国地方も荒れ狂った。

秋の農作物も計り知れない打撃を受けたので、人々から「明和九（めいわく）のせいだ」という声が起こり、その年の十一月半ばに「安永」と改めるほどであった。

このような時期に、大竹の人々は「宝篋印塔」やこの「法華塔」を懸命な願いをこめて建立したのである。

火伏地蔵

像 高 八十七cm

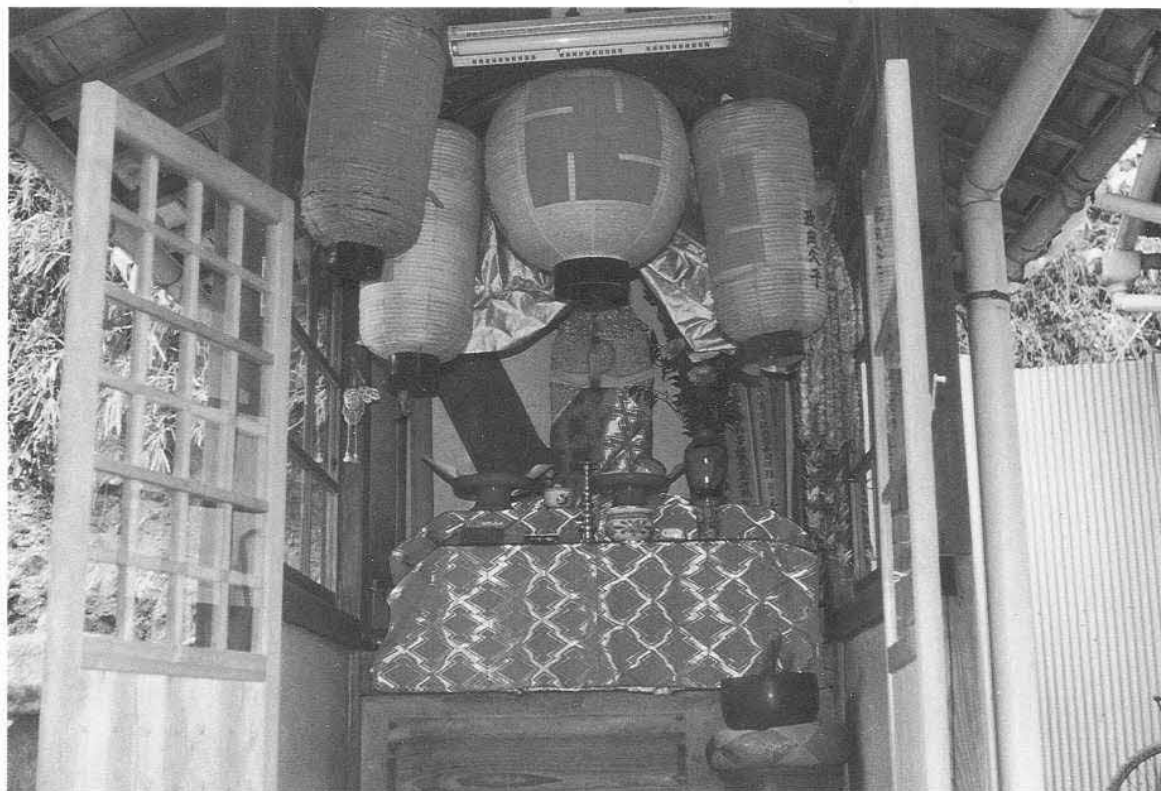
彫刻の形式 丸彫り立像

石の種類 花崗岩

法華塔と同じ祠の右手に位置しているのが火伏地蔵で、台座に寛政丁巳九年（一七九七）八月吉日と刻まれていることから、この年に建立されたものであろう。

「この地域には火災が起らないように」とと東に向く大竹を見つめながら立つておられる。

元町地区には、一丁目と三丁目の山麓に火の神様を祀る秋葉神社があり、この地域には昔から火事が少ないといわれている。



日切地蔵

所在地 大竹市元町四丁目

像 高 五十九cm

彫刻の形式 舟型浮彫り立像

石の種類 花崗岩

地蔵菩薩には、多くの名称があるが、日切（限）地蔵もその一つである。

薬師寺境内にも、立派なお堂に「日切地蔵」が祀られている。

この地蔵さんは、日を限って日参することで願いごとがよく叶うといわれる。

昔は願いをかけるため、山門前で履物を脱いで素足でお参りするのが習わしであつたといわれる。現在ではそのような姿は見られない。

地蔵さんとよだれかけ

赤や白の艶やかな模様の「よだれかけ」をした地蔵さんは、かつて室町から江戸時代にかけて賽の河原の思想が信仰形態となり、亡くなったわが子のために、地蔵さんに救いを託し、わが子を判別してもらうため生前着用していた産着やよだれかけを地蔵さんに供えて、その子の匂いを知っていたかこうとした。これがよだれかけの始まりといわれている。



経塚山四国八十八ヶ所順拝霊場

所在地 大竹市元町四丁目

彫刻の形式 八十八軀舟型浮彫り

石の種類 花崗岩

この順拝三三霊場が、いつの時代に作られたかはさだかでないが人の名前から推測すると、およそ二百年前の一八〇〇年代初頭と考えられる。大竹村では和紙の生産が盛んであった。

そのため江戸後期には海運業も盛え、大阪・四国方面へ行き交う船も多くなつた。

このため航行の安全祈願のため四国八十八ヶ所順拝も盛んに行われ、海に帆を張る男たちにより地元で順拝できる三三霊場作りがもちあがり実現したのであろうか。

順路は、薬師寺境内の大師堂から、山門脇の一番札所を右に折れて、「浴の谷」を登り経塚山を一巡して薬師寺に帰ってくる順路であったが、昭和二十六年のルース台風により「浴の谷」が大きな被害にあい、現在では山門を出て右手にとつて回り、山腹で一度交差して薬師寺に帰るといふ順路になっている。

毎年四月の弘法大師の大祭には、多くの人が夜明けとともに参りし、一日中賑わう。

講の方々の温かい接待により、大竹でも元町あたり特有の、祝いごとで作られる「おむすび(具入り)」をもらつて帰るのが楽しみである。

順拝と巡拝

四国八十八ヶ所遍路の旅は、「順拝」といい、畿内を一巡する西国三十三番観音霊場は「巡拝」と、順と巡を上手に使い分けている。



五輪塔「歴代大和尚供養塔」

所在地 大竹市元町四丁目
塔 高 一三六cm

地輪 四十四cm 水輪 三十cm

火輪 二十三cm 風輪 十九cm

空輪 二十cm

石の種類 花崗岩

薬師寺は、市域でもっとも古い歴史をもつといわれる。古くは裏の経塚山に西福寺という寺院があり、その護摩堂を現在地におろし薬師寺としたといわれる。

近年まで、乳薬師として近郷に知れわたり、多くの信者をもち日毎お参りが絶えなかったという。

この薬師寺の裏山を少し登ると歴代大和尚の墓（無縫塔）があり、これを供養するために建立された五輪塔は、市域ではもっとも大きく、形も整っていて台座を含め二m〇二cmあり、梵字がくつきりと刻まれている。

空	五
風	下
火	ノ
水	ハ
地	ヲ



大地荒神 白石神社

所在地 大竹市元町二丁目

自然石 高さ不明

石の種類 砂岩

天明六年（一七八六）八月下旬、大風水害により田畑は流出し、さらに同七、八年も引き続き同じ被害があった。

ところが不思議なことに、この「白い大きな石」の座っている周辺だけは被害が少なかった。

人々は集まり話し合い、寛政元年（一七八九）八月二十四日、ここに祠を建て守護神としてこの白い石を祀ることになった。

明治三十一年（一八九八）悪疫が流行し、多くの村人が難渋するが、この地区住民には被害がなかった。

氏子が集まって、この年の二月二十四日、社を建て祭祀することになり現在に至っている。

祭事は、春 月と秋九月に行われる。

その後国道一八六号線拡張工事の際、現本町郵便局のところにあったが、少し西に移動し現在地となった。

市域は、かつて手漉き和紙が盛んであったことから、大正昭和二十年代までは、紙漉きで痛めた、しもやけやあかぎれの手をいたわり、防鹿あたりからもこの白石神社にお参りする女性の姿があったといわれる。



迫山開運地藏菩薩

所在地 大竹市元町三丁目

地藏菩薩立像

像 高 五十一cm

彫刻の形式 舟型浮き彫り

石の種類 花崗岩

弘法大師坐像

像 高 三十cm

彫刻の形式 丸彫り (彩色)

石の種類 花崗岩

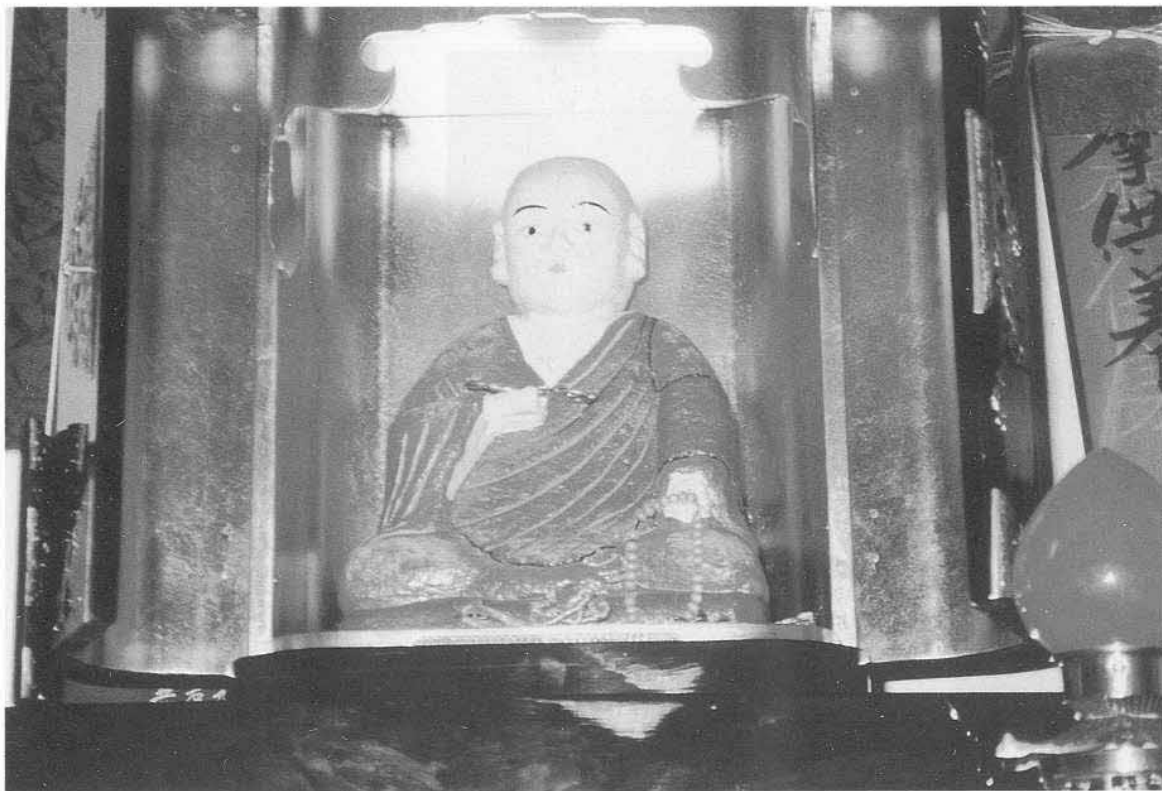
梅ヶ谷共同墓地入り口に程近く、左手に「梅ヶ谷奥の院」がある。これは佐伯八十八ヶ所霊場の番外堂で、通称「お大師さん」で親しまれ、弘化二年（一八四五）の開山といわれる。立派なお堂が昭和五十四年に信者によって新築された。

ご本尊は、地藏菩薩で、お祭りは毎月四のつく日とされているが、ここでは十四日に多くの信者がお参りし数珠繰りをしながら御詠歌をあげ、お祈りをしている。

話し合いをしながらコミュニケーションの輪も広がっている。

一方、弘法大師像は、最近まで木造であったが、腐敗があまりにもひどく、昭和六十二年十月、石造りの弘法大師坐像を建立した。彩色を施した立派なお姿になられたので、宮島の大聖院の住職を招いて入魂し、古来の木造の弘法大師像は、宮島の弥山で護摩とともに焚いていたのだといわれる。

弘法大師の入寂が、旧暦の三月二十一日であるところから、春の大祭は一ヶ月遅れの四月二十一日以後の日曜日に行われる。多くの人々がお参りし、接待の「おむすび」などがくばられる。



弘法大師 空海

四国八十八ヶ所の霊場を開創整備された人で、わが国における「真言宗」の開祖である。

宝亀五年（七七四）六月十五日、現在の香川県善通寺市に生まれ、幼名は「真魚（まお）」といった。

阿波の大滝嶽や土佐の室戸岬など大自然のなかで修業、延暦二十三年入唐して青竜寺の恵果和尚に師事。

帰国後高野山を賜り金剛峰寺を開創、弘仁十四年（八二三）東寺を賜り教王護国寺としたのである。

承和二年（八三五）三月二十一日高野山で入寂。

その業を讃え入寂八十七年後の延喜二十一年（九二二）「弘法大師」とおくり名された。

大師をおまつりしてある善通寺は、「御影堂」といわれ、その他は大師堂である。

「遍照金剛」は、光明があまねく照らし、その本体は不壊であるという意味で、空海の金剛名号である。

「南無大師遍照金剛」は、信者の口から絶えることはない。

「同行二人」は順拝道中、弘法大師と一緒にという意味である。

延命地藏

所在地 大竹市本町
像 高 百八十二cm
彫刻の形式 丸彫り立像
石の種類 花崗岩

市域で一番大きい石仏で、江戸中期この地がまだようやく新開地として整い始めたころから祀られているといわれる。

そのころ大竹は、山沿いに鼻操川、青木新開あたりから古川が流

れ、まだまだ不安定な土地で、土手がようやく築かれ、海の安全祈願のため大滝神社にお参りする船がこのあたりに錨をおろし参拝したと伝えられている。

現在の本町通りが、瀬戸の島々を見わたせる堤防であつたといわれ、この地藏さんは土手の内側にあられた。それで一番下の台座は道路のかなり低い所に埋もれている。

立派な地藏堂は、昭和三十年代になつて建てられたものである。毎年八月二十四日の大祭には、御詠歌や数珠繰りがおこなわれ、春秋の彼岸にもお祭りがあつた。



こけ地蔵

所在地 大竹市本町二丁目
像 高 四十五cm
彫刻の形式 舟型浮き彫り
石の種類 花崗岩

この地蔵は、「こけ地蔵」といわれている。転げるのこけか、植物の苔か、名前の出所はつきりしない。
明治の半ば頃、この地の土の中に埋もれていたところを夢の中のお告げで掘り起こされ、祀られたといわれる。
江戸中期頃の大竹は、山手を鼻操川が流れ、青木新開付近には古川が流れるという流動的な地形で、洪水に悩まされた時代であった。そんな時代にこの地蔵さんは、どこからか流れついて、この地に埋もれていたものと思われる。

最近までこの周辺の人々による「講」もあつたが、現在ではこの土地所有者がお守りをされている。
しかし、相変わらず近所の人たちのお参りが絶えない。



中山大師堂

所在地 大竹市本町二丁目
像 高 十五cm
彫刻の形式 総高八十四cmの笠塔婆形状の塔屋内に銅製大師像を納める
石の種類 花崗岩

約百三十年前、福木与一氏により四国から持ち帰られ、中山（白石一丁目）に安置されたもので、中山大師と称されている。
地元の多くの尊崇を集め、慶応元年（一八六五）礼拝堂が建ち、当時の灯籠が現存している。

昭和三十五年、沿岸部の工業化に伴い、旧大竹海兵団跡地にあつた大竹高等学校が中山に移転された。

その際中山大師は、信者の多い現在地に迎えられた。

佐伯八十八ヶ所第十一番霊場としてお参りの人があとを断たない。



大河原池の首なし地蔵

所在地 大竹市白石丁目
像 高 四十二cm
彫刻の形式 丸彫り立像
石の種類 花崗岩

大竹・油見・立戸地区の背後の山を、大河原山と呼んでいる。
この山に大きな灌漑用水の人工池がある。

享和三年（一八〇三）の小方村絵図に、すでに上大河原溜池、下大河原溜池が描かれていることから、約二百年も前にこの池は存在していたことがわかる。

上大河原池は、昭和二十六年のルース台風により決壊し池はなくなつた。

下大河原池は昔のままの面影を残している。土を盛った堰堤の南側に、「南無大強羅首無地蔵尊」と力強い筆さばきで書かれた「幟」が立てられ、そこに首無地蔵が祀られている。

この地蔵さんは、百八十年前の文化八年（一八一二）に建立されたもので、大河原池の歴史をすべて見ておられる。

水量調節をするお百姓さんの姿、子供たちの山遊びの元気な声、また明治後期の堰堤決壊の様子を見てこられた。

そして現在は灌漑用水としての機能を終えた湖面をのどかに泳ぐ鯉を見つめておられる。

海拔 三百mの池のそばに立つこの地蔵さんにお参りする人は今も多い。



台座に刻まれた文字

正面 天下泰平

□ 苑法界萬靈方

国家安全

右 文化八年天 正月吉日

左 大竹邑 願主 平八

（年号の後に付けてある「天」は、年の始めを指す。）

みちびき地蔵

所在地 大竹市南栄二丁目
 像 高 五十二cm
 彫刻の形式 舟型浮彫り坐像
 石の種類 花崗岩

JR山陽本線が、小瀬川鉄橋にさしかかる百m手前の、鉄道土手にある。踏み切りによる事故死や自殺の人が次々と絶えないため、昭和三十五年近所の人たちが、鉄道ガード脇に祀った。
 昭和四十三年のガードの拡張工事の際に現在位置に遷された。
 以来、死亡者はほとんどなくなり、年一回の供養祭が「講」の人々によって行われている。



南栄の日切り地蔵

所在地 大竹市南栄三丁目
 像 高 三十八cm
 彫刻の形式 舟型浮彫り立像
 石の種類 花崗岩



昭和十九年、この地の人々が夢でお告げを受けて祀られた。病氣治療・開運に確かな御利益があるというので、お参りが絶えない。お堂は昔の「中新開」の堤防の跡、通称古土手に建っていて、この土中から出てきた一軀のお地蔵さんも加えてお祀りされている。春秋には、近隣の人たちによって供養が行われる。